

21世紀の視点でとらえた新しい中国像

溝口雄三

〈東京大学名誉教授〉

I

この原稿を書いているときに、中国の有人人工衛星「神舟」の話題が日本のメディアを賑わせている。20世紀初頭に義和団事件の苦難を背負った中国が、21世紀初頭に有人人工衛星で話題になるとは、20世紀始めに一体誰が想像しただろうか。

歴史は不断に流動している。歴史家の視座も、E.H. カークがいう歴史の現在に参加する歴史家であるかぎり、歴史とともに動いている。われわれ歴史家は、21世紀初頭にふさわしい中国近代像を模索しなければならない。

これまでの中国近代像は、西欧中心主義的な視座によって造形されてきた。

曰く、中国近代はアヘン戦争から始まる。

曰く、中国は資本主義化に立ち遅れ半植民地化の道を余儀なくされた。

曰く、中国近代の過程は反帝・反封建・反植民地の闘争の過程であった。

もちろんこういった歴史叙述は歴史の事実に基づいて組み立てられており、それらは客観的な歴史事実に違いない。しかし、それはだからといって、歴史の全像を伝えたものとは言えない。例えば、そこに河と山と平野があるとき、河の存在だけを伝えたとしたら、その河の存在自体は客観的な事実とは言えても、河、山、平野の存在という事実の全体像を伝えたものとは言えないだろう。アヘン戦争史観、資本主義立ち遅れ史観、反帝・反封建・反植民地史観は、すべていわゆる“西欧の衝撃”を起因とした歴史観であり、中国本来の姿を捉えたものではない。

II

これらの歴史観は実は20世紀の前半の歴史過程から生み出されたもので、その意味でそれは20世紀に必要とされた、20世紀に時限的なものである。

例えば、「反封建」というのは清末の嚴復の「社会通詮」を受けて「五・四」期に生まれた革命的知識青年のスローガンであり、それは西欧の個人主義・自由・人権などの近代的な諸価値との対比から取り上げられた命題である。具体的に言えばそれらは宗族的な共同主義を、「封建的家父長的支配」として打倒目標としたものである。

しかし、中国の全体像を俯瞰する眼で見てみると、まず、中国には西欧や日本に存在し

た社会制度としての封建制——例えば長子相続による世襲的身分制は存在しておらず、「封建的」とされた宗族制も、その内実をよく調べてみれば、それは均分相続制から析出される社会流動を防ぐための一種の社会保険、相互扶助システムであって、それを「家父長的支配」というのは一面だけを捉えたものということが分かる。

「反帝・反植民地」も確かに帝国主義の侵略またその結果としての半植民地化という歴史事実を反映したものであった。しかし、中国はインドのように全土を植民地化されたのではなく、半植民地化といっても国土の半分が植民地化されたというでもない。また19世紀の当時の中国知識人は現在のような国家主義や民族主義思想をもっていなかったので、国土についてはかなり鷹揚であった。例えば清末の革命家、譚嗣同は、新疆の土地をイギリスに与えれば、その土地を巡って英露二国間で領土争いが生じ、中国へ侵入してくる危険が遠のき、中国は安穩でいられると述べている。中国の知識人が植民地問題に敏感になったのは、第一次世界大戦前後の民族主義の昂揚以後のことで、それ以後、誇り高い中国知識人にはたとえわずか一皿分の土地でも、それが植民地であれば絶対に許容できなかった。その点は、インドの知識人、例えばタゴールが植民地に対して包容的であったのと異なる。

すなわち、外に反帝・反植民地、内に反封建というのは20世紀前半の中国知識人にとって時限的な課題であり、それは決して中国全体の通時的な歴史課題ではなかった。

またアヘン戦争史観も、反帝・反植民地闘争の起点として遡られたものであり、これを中国近代の総過程の起点とするのは、歴史の全体像を歪曲するものである。

III

詳しい解説は省くが、中国で総過程としての近代過程が始まったのは、16～17世紀で、以後、清朝の繁栄の中で王朝体制を崩壊させる民間の力量が増大し、辛亥革命となった。

かつて私は『方法としての中国』という本の中で、中国では「封建」という語は、16～17世紀以降は地方自治を含意した語であり、この民間のいわゆる自治は、さまざまな形態を以って民間層に広がり、特に太平天国以降には、省の軍事権をも掌握しはじめ、やがて省の独立として出現するに至った、といういきさつを述べたことがある。

つまりこの清朝300年における中国の最大の歴史過程は、王朝体制が徐々に崩壊する過程であった、ということである。人は康熙・乾隆の盛世を言うかもしれないが、その盛世こそが民間の力量を増大させたのであり、まさにそれは弁証法的な矛盾の産物であった。

われわれは、辛亥革命が省の独立運動として出現したということの時代性を知る必要がある。中国では、王朝が崩壊するときには、おおむね地方反乱という形を繰り返すこと、金観涛氏がかつてその著書で書かれたとおりである。

王朝末期には中央集権的な求心力を失い、地方反乱によって分散化が起こり、やがて次の王朝へと収斂する、という一種の歴史運動を繰り返すのである。しかし、清末の省の独立運動というのは、行政単位であると同時に政治単位でもある省が、政治的に独立し、共

和もしくは連邦制を目指したもので、同じく地方分散といっても、明末の、李自成、張献忠、呉三桂らの地方割拠とは全く異なる。つまり省の独立という形態は、制度的であり自律的であって、その制度的形態および制度的自律性自体がすでに反王朝制度的であって、だからこそ辛亥革命は、王朝の倒壊ではなく王朝「制度の倒壊」なのである。

IV

以上のような観点に立つとき、われわれは現代中国にどのような歴史像を付与しうるか。

まず、われわれは、アヘン戦争近代史観の局部性を突破し、中国が内発的な歴史の動力によって16世紀末から20世紀半ばまで、二千年続いた王朝制度をゆっくりと終焉させ、辛亥革命を経てやがて新しい国家体制すなわち中華人民共和国を創り上げた、という長大なロマンに富んだ歴史物語を提供するであろう。1911年の辛亥革命から1949年の新中国成立まで、38年間の動乱があった。内乱だけでなく帝国主義列強の侵略、そして周辺国日本の侵略もあった。この38年間は長いといえば長かったが、いわゆる唐宋変革期における唐朝滅亡、宋朝成立までの五代という時代の53年に及ぶ割拠と動乱に比べれば、まだ短い。この38年間は複雑であるが、基本的には、秦漢帝国以来、中国二千年の王朝体制の終焉とそれに続く新国家体制の模索という中国史最大のドラマを、演じていた期間として特徴づけられるであろう。そして、この時期こそ、中国が最も求心力を失い、抵抗力を弱めた時期であった。先ほど私は、周辺国日本の侵略という言い方をした。日本は中華文明圏の周辺に位置し、北方の騎馬民族と似て、武の文化をもち、豊臣秀吉の時代から中国に出兵することを目指して、虎視眈々としていた国、ということである。日本の中国侵略には資本主義の形成の先後という問題も絡んでいるが、周辺国の侵入という要因もある。つまり、中国本土が疲弊したときに必ず起こる周辺民族の中国侵入という歴史事象が、王朝体制の倒壊というこの38年間に、帝国主義・資本主義という衣服をまとって出現した。その時期の中国は譬えてみれば脱皮して横たわっている大蛇のようなもので、小動物の攻撃にも十分反応できない時期であった。しかし、結果としては、中国はあらゆる侵入者を放逐し、新しい国家建設を成功させた。

この歴史の太い流れから見れば、アヘン戦争史観や反帝反封建史観などが、いかに局部的な歴史観であり、結局のところ20世紀の必要から出た歴史観であって、21世紀の現在にはもはや不十分な歴史観であることがお分かりいただけよう。

V

ではわれわれは、21世紀の現在、どのような視座で中国の歴史像を結像するのが望ましいか。

最近私は、『思想』という雑誌の「思想の言葉」という欄に、「縦帯と横帯」という文章を書き、その終わりの方で次のように言っている。

清朝は民間の力量と相互補完的な結合を権力の土台とし、その中で民間の力量は権力と

癒着しながら増大していった。その力量こそが太平天国（1854－64）を生み、またそれを鎮圧するにも湘軍、淮軍という地方自前の軍隊（後の軍閥）の編成を必要とさせ、遂に軍事力まで民間の手に制御されるに至った。湘軍、淮軍の活躍に対し、当時革命派であった汪精衛が「満人の中央集権に替わって、漢人の地方分権が始まった」（『民報』8号）と称したのは、事態の本質を正確に見抜いたものである。こうして省の行政単位ごとに官・軍・民の権力が打ち立てられ、その独立によって王朝体制自体が、終焉の時を迎えた。……以来38年、列強の内政干渉、軍閥の割拠、南北の中央政府の対立、日本の侵略など、アヘン戦争以来続く苦難の中で、王朝時代の天の統治理念（均貧富、万物各得其所、民以食为天）を大同主義、三民主義、社会主義の理念として換骨奪胎しながら継承し、中華人民共和国を建国した。これが私のいわゆる「縦帯」である。この縦帯というのは、誤解を防ぐために言うと、形質をもった定型的な実体ではなく、単なるイメージである。縦というのは時間の流れであり、帯というのは時間のもたらす変化の質である。例えば、明朝中葉まで主に士大夫の道德律であった儒教が王陽明らによって民衆層に広められ、それが明末以降清代になると、「礼教」と呼ばれて宗族の結合倫理や郷村秩序倫理として民間に広汎に普及し、民国初期には「人を食う礼教」と非難されながら、宗族制における相互扶助、相互保険システムの面は残りつづけ、毛沢東革命後には、少なくとも文革までは、相互扶助や利他の社会主義倫理として、国家規模で再生された、この儒教における時代に応じた多面多様な変化と展開および変化しながらの連続と不連続の様相を「帯」という言葉のイメージとしている。一方、横帯というのは、19世紀になって資本主義・帝国主義・西方近代文明という三つの「近代」が地球を巡るようにアジアを覆ったその周知の「近代帯」をいう。

VI

こういう縦と横の帯の交錯という見方から言うと、従来の横帯だけのつまり前掲のアヘン戦争史観などだけの見方は、非常に単調で、例えば伝統と近代といった類の二分法に象徴されるように、伝統はおおむね抽象的、静止的、固形的にとらえられ、まさに近代化しつつある現代のドラスティックな変化の中にこそ伝統が変形しつつ生きているという流動的・現在的視点を喪失しがちである。これまで中国の近代は主に横帯への対応（反帝・反植民地、抵抗、受容）という形で考察され、反応する縦帯の変動・展開の側から横帯を見るという視点が欠けていた。

そのため、例えば、現代中国は社会主義か資本主義かといった類の二分法的思考が後を絶たない。こういった疑問に答えるには、横帯だけでなく縦帯も視野に入れて全局的な視野の広がりによって、縦と横との交錯の構図として中国の現在を見るべきであろう。

また、縦帯といえど、ヨーロッパの近代も一つの縦帯であり、それは中国のそれと同じではない、逆にいえば中国の縦帯はヨーロッパのそれと同じでないことがそのまま認められなくてはならない。近代という厄介な歴史区分において、われわれアジア人が横帯に巻

き込まれることなく、自然に縦帯を自己の歴史に組み入れられるよう期待したい。

以上、現代中国を観る歴史の目について報告した。